

第3回定期総会の報告

上田高等学校北海道同窓会の第3回定期総会・記念講演・懇親会が2017年5月20日(土)12時から札幌市内のホテルマイステイズ札幌アспенで開催され、14名の会員が参加しました。

総会では2016年度の活動および収支決算が報告され、2017年度の活動計画および収支予算(案)が承認されました。また、任期満了に伴う役員改選が行われ、現役員6名全員の再任と新たに矢島崇さん(67期)と金井貴生さん(94期)が幹事に選任されました。

総会終了後の記念講演は、中曽根公さん(51期)が北海道への思いを語られ、引き続き懇親会では参加者から近況報告があり、最後に校歌を斉唱して終了しました。

2016年度活動報告

北海道同窓会の2年度目にあたる2016年度は、新たな取組みとして地区交流会と会員拡充の取組みを行うと共に恒例の諸行事を会員の皆様のご協力を得て概ね計画通り実施することが出来ました。以下、項目ごとに報告します。

1. 会員の現況

45名で発足しましたが、期中の増加2名、脱会等による減少3名で、期末現在の会員数は44名です。なお、学生会員は5名です。

2. 会議の開催

(1) 第2回総会

2016年5月28日(土)に札幌市内のKKRホテル札幌で開催。会員13名が出席。2015年度活動報告並びに決算・監査報告、2016年度活動計画および予算、2名の役員補選(中村今朝良さん65期、杉山孝治さん66期)を決議。

(2) 役員会

- 第1回 2016年5月16日開催。定期総会議案、母校社会講座講師推薦を協議。
- 第2回 2016年6月17日開催。役員役割分担、地区交流会の開催、会報第3号の発行を協議。
- 第3回 2016年9月20日開催。観楓会の開催を協議。
- 第4回 2017年1月26日開催。会報第4号の発行、会員拡充の取組みを協議。
- 第5回 2017年3月15日開催。第3回定期総会の開催を協議。

<2016年度 収支決算書>

科 目	予算額	決算額
I 収入の部		
1 前年度繰越金	41,834	41,834
2 年会費	29,000	26,500
3 総会会費	60,000	60,000
4 雑収入	30,006	33,245
収入合計	160,840	161,579
II 支出の部		
1 総会経費	70,000	70,278
2 会報発行経費	10,000	0
3 郵送代	30,000	15,056
4 予備費	50,840	11,808
支出合計	160,840	97,142
III 当期収支残額	0	64,437

(注) 年会費の前払い分を除くと、正味の当期収支残額は55,937円となります。

3. 決算監査

2017年5月16日に実施。総会では福田監事より適正に処理されている旨の監査報告がありました。

4. 地区交流会

同窓会の諸行事に参加が困難な札幌圏外在住の会員との交流を図る目的で、十勝管内足寄町で開催した。札幌から6名、十勝の会員2名、計8名が参加。会員の吉川友二さんの牧場を訪問し、チーズ作り体験をし、放牧酪農の実態を見学した。近隣の温泉に1泊の予定であったが、大雨で避難を余儀なくされ、避難所生活というおまけ体験もあり、同窓の絆をより強くして終わる。

5. 観楓会

2016年11月11日に、札幌市内のイタリアレストラン「ダイニング・イル・ネージュ」で開催し、12名が参加した。

6. 会報の発行

第3号 2016年9月16日発行。

第2回定期総会の報告、記念講演～櫻井武さん(43期)の「わが人生」、皆さんこんにちは!!～西澤伸志さん(68期)・大谷文昭さん(65期)、菅沼英二さん(48期)、地区交流会の報告、同窓会本部通信

第4号 2017年3月15日発行。

杓掛高夫さん(63期)の水彩画、観楓会の報告、母校社会講座講演報告～北澤多喜雄さん(73期)、誌上講演～①石黒浩一郎さん(76期)の建築設計への道(第一部)、②白石英才さん(90期)の少数民族言語研究、皆さんこんにちは!!～櫻井武さん(43期)・山岸宏一さん(61期)・松本美生さん(87期)、同窓会本部通信

7. 会員拡充の取組み

同窓会設立から2年が経過するので、再度道内在住の未加入同窓生に加入を呼び掛けた。取組み経過と結果は次の通り。

- ・2017年1月30日 本部に北海道在住の同窓生のリストと宛名シール作成を依頼
- ・2月12日 対象者19名(うち設立後の新規在住者5名)に北海道同窓会への入会案内文書を郵送
- ・結果 加入希望1名(陸別町在の平等志成さん62期)、希望しない4名、未回答14名

2017年度活動計画

- | | |
|-------------|-------------------------|
| 1. 第3回総会の開催 | 5月20日(土)
札幌市 アスペンホテル |
| 2. 地区交流会の開催 | 8～9月 札幌圏外の地区での開催を検討する |
| 3. 観楓会の開催 | 11月 |
| 4. 会報の発行 | 年2回程度(夏、冬) |

<2017年度 収支予算書>

科目	前年度実績	予算額
I 収入の部		
1 前年度繰越金	41,834	64,437
2 年会費	26,500	26,000
3 総会会費	60,000	56,000
4 雑収入	33,245	30,000
収入合計	161,579	176,437
II 支出の部		
1 総会経費	70,278	80,000
2 会報発行経費	0	10,000
3 郵送代	15,056	30,000
4 予備費	11,808	56,437
支出合計	97,142	176,437
III 当期収支残額	64,437	0

(注) 学生・80歳以上(以上年会費免除者)および年会費の前払い者を除く本年度年会費被徴収者26名

役員改選

会則の付則の定めでは、同窓会設立当初の役員の任期は「平成 29 年度の総会で新たな役員が選出されるまで」(2 年) となっており、今総会で新たな役員を選出することになりました。

選出にあたっては事務局から、会員の底辺を上げ、諸行事参加率を高めるためにも早々に役員の世代交代を図っていく必要がある一方で、設立間もない同窓会をしっかりと軌道に乗せていかなければならないこと等を勘案して、今回は現役員 6 名全員を再任させてもらい、更に幹事を二人増員したい旨の説明と役員候補の推薦があり、原案通り承認されました。この体制の下で向こう任期 3 年の間に役員の役割分担の移行を図りながら、1~2 年後には役員体制の世代交代を図る考えですのでよろしくお願いします。

<新役員体制>

会長	清澤 通俊 (64 期)	再任	幹事	杉山 孝治 (66 期)	再任
事務局長	北澤 多喜雄 (73 期)	〃	〃	矢島 崇 (67 期)	新任
幹事	大谷 文昭 (65 期)	〃	〃	金井 貴生 (94 期)	〃
〃	中村 今朝良 (65 期)	〃	監事	福田 安矩 (64 期)	再任



総会での集合写真

前列左から 福田 (64 期) 矢嶋 (59 期) 平尾 (51 期) 中曾根 (51 期) 清澤 (64 期) 大谷 (65 期)
後列左から 沓掛 (63 期) 山岸 (61 期) 中村 (65 期) 西澤 (68 期) 杉山 (66 期) 金井 (94 期)
北澤 (73 期)

第3回定期総会記念講演 『柔道がとりもつ北海道との縁』

51期 中曽根 公さん（札幌市在住）

只今、紹介のありました中曽根です。坂城町出身で、昭和28年に上田松尾高校を卒業しました。3月の初めだったと思いますが、同窓会から連絡があり、東京で大学を出て北海道に就職し、最終的にも北海道に住んでいるのであるから何か北海道に特別な思い入れがあるのではないかと、そのあたりの事を話してほしいと言われました。今日は私と北海道との関わり、そして上田松尾高校時代の思い出、また時間があれば多少ゴルフの話などをしてみたいと思います。



北海道との最初の関わりは私が大学2年のとき、柔道部が戦後初めて北海道に遠征した時のことでした。札幌に着いて最初に泊まったのは北大の恵迪寮でした。集会所のような処で畳が敷いてあり、床が抜けているような変なところに泊めていただきました。駒場寮も汚いが恵迪寮も酷く汚い印象でした。その後、当時は既に知事だったと思うのですが町村金吾さんが柔道部の先輩で、その方にお世話になって羊ヶ丘で羊の放牧を観てジンギスカンを御馳走になりました。それから旭川では京大の先輩で国策パルプにいた早川さんという方に生まれて初めて座敷に芸者を呼んで宴会をさせていただきました。その後夕張に行き、これは吃驚したのですが、数百人入る劇場の舞台の上で試合をやらされたんです。下を見るとあがってしまうので出来るだけ下を見ないようにして試合をした記憶があります。そうして一回目の遠征は2年生ということもあって他の地を回ることも無く真直ぐ東京に帰りました。

その翌年は中国・四国・九州に行き、2年後に再び北海道に遠征にきました。札幌では警察学校の寮に泊めていただき、試合は多分自衛隊とやったような気がします。このときは遠征自体には強烈な印象は無かったのですが、遠征が終わった後に仲間を組んで道東を観光しました。北見からバスに乗って美幌峠に行くと風が下からびゅうびゅう吹いてきて、眼下には屈斜路湖があり、この雄大な景色を見て北海道は良いところだと強く印象に残りました。

次に北海道との関わりが出来たのは大学4年の時です。私の卒論テーマは「海の下をどこまで浅く掘れるか」というものでして、今は世界遺産になりました長崎県の三菱鉱業の炭鉱があった端島という島の近くに、崎戸島といって採炭量は端島よりずっと多いのですが、やはり海の下を掘っている炭鉱があってそこに実習に行きました。その実習の打上げの時に、会社の担当者に「中曽根さん、三菱に来るか、それとも北炭にするかい」と言われたのです。なぜ北炭かというと、当時の炭鉱は既に斜陽になっていて、その中でも北炭が一番経営内容が良かったんです。「じゃ、俺は北炭に行こう」と思って、大学に帰ってきて、石炭専攻の連中が5~6人いた中では私が一番腕力が強いものですから、俺が北炭に行くぞと宣言したらすんなり北炭に行くことが決まったような次第でした。

入社試験はあったのですが、これがまたちょっと変わってしまっていて、柔道とか北海道の話をしているうちにある試験官に「君は北海道に行きたいのか、東京はダメなのか」と問われて、思わず「いや北海道へ行きたいです」と答えると、今度はその理由を聞かれ、「北海道は雄大ですから」と答えると試験官が皆笑い出してそれで試験は終わりました。

そんな訳で昭和34年に北炭に入ったのですが、北炭には海の下炭鉱は無いものですから、川の下を掘っている赤間鉱(赤平市)という炭鉱があってそこに配属されました。赤間鉱はその後1年程で北炭から分離されたのでそこから夕張に移りました。夕張では保安課というところで何か変な計算を盛んにさせられました。当時、夕張一鉱というのは非常に良質の石炭が採れたんですが、炭層が非常に狭く自然発火がし易いところだったのでそれを防ぐ手立てが何かないものか考えさせられました。当時は大学を卒業したばかりですから頭も良く回ったことから、様々な方法を考えてそれが採用されたなんていうこともありました。

そうこうしているうちに、赤間鉱で私の先輩だった東北大出の方が「荏原インフィルコ」という会社に在りて、この会社は上水道とか下水道の水処理施設を施工する会社ですが、今度新しく団地の下水処理を担当する課を設けるので来ないかという誘いを受けました。赤間鉱では大変世話になった先輩ですからその先輩に言われたのではしょうがないなと思って昭和39年に移ることになりました。

荏原インフィルコに転職して1年後には福岡に転勤し、7~8年居て次は広島に行きました。広島にいた時にカミさんが身体をこわしまして、私がカミさんの面倒を看れないということでカミさんは札幌に入院しました。実はカミさんは札幌の出身で、私が夕張にいたときに拓銀にいた柔道部の後輩の紹介で結婚した訳です。その後名古屋に転勤になり、それから東京に移り、浦安に土地を買ってこうして東京で終わるんだろうと思っていたところ、北海道にあった荏原インフィルコの子会社に行けという話になりました。どうしようかと迷ったのですが、カミさんが北海道出身であり、子どもたちもカミさんの親になついているので良いかと判断して、昭和64年、54歳の時に北海道に戻ってきました。北海道に来てからも東京に来ないかとかベトナムに会社を創るんでその責任者で赴ってくれないかという話もありましたが、もう歳も歳なんで勘弁してくれということでこのまま北海道に落ち着くことになり現在に至っている次第です。要するに私と北海道との関わりは一に柔道部の遠征で美幌峠の雄大な景色を見たこと、二に北炭の入社試験で北海道を希望したこと、三にカミさんが札幌出身であったことに尽きるのではないかと考えています。

次に、高校から大学の話の少しを少しします。高校では柔道班に入りました。ちょうど私が高校に入ったあたりから進駐軍から武道が解禁されて、今でも高校の道場に行きますと名札が掛かっていて非常に懐かしく思います。3年のときに、東信地区の少年柔道大会がありまして優勝しました。ところが夏の高校総体の予選では丸手に負けたんですね。私が負けたから団体戦で負けたんで、多少責任を感じました。1年後輩には前の同窓会会長の矢嶋君(59期)の兄貴とか真田の町長をやった箱山君がいて、この二人は強かったのであと一人を強化すれば団体戦には勝てるだろうと考えて12月まで受験勉強そっちのけで柔道をやりました。これにはちょっと自惚れもあって、1~2月勉強すれば東大には入れるだろうと思っていたのですが、そんなに甘くはなくて見事落っこちました。しかし1浪して翌年には入ることが出来ました。

大学に入ったら、当時は旧制高校の生き残りの方とか、旧制高校を出て少し働いて学費を稼いで入ってきた方とか、あるいは陸士・海兵から同じような状態で入ってきた方がおられて、寮でそんな方々と接すると知識の豊富さに圧倒されるんですね。毎晩のように寝ないでよく議論をしました。そういう方々を観ていると授業に出ないんですね。それで、「ああ、大学は授業に出なくても試験を通れば良いんだ」と思ったんです。ところが私は理科一類というところに入ったものですから、ここでは実験が必修だったんですね。実験にパスしないと進級できないんです。それを知らなかったものですから、1年で見事進級できなくて留年することになりました。翌年どうしたかと言うと、1年下の連中を柔道部に囲い込みまして、その連中に実験に行かせてどうにかパスするという芸当もしました。

このようなひどい話は一杯ありますが、もう一つだけ紹介すると、鉱山機械という学科があったんですが、ほとんど授業に出ていないもんですから、卒業する時に最後の授業に出たら先生に見咎められて、問題を5問出すから全て解いて持って来い、それが出来たら卒業させてやるという話になりました。こちらは授業に出ていないので出来るわけがなく、周りの者にやってもらって何とかそれをパスしました。それから卒業させるかどうか先生方の審査があるんですが、その主任の先生から「中曽根君は単位が少し足りないんじゃないか」と言われ、調べてみたら0.5足りなかったんです。選択で「採油概論」というのを1単位採っていたのでそれを言うと、先生方も大したものだからこんな奴を大学に残しておいてもしょうがないと思ったのか何とか卒業することができました。

最後に、北海道の上田高校同窓会は非常に良い会です。私が参加したのは昭和64年に北海道に戻ってきて、同期の平尾君とか中島君に誘われて行ったのが最初でした。今日は出席していませんが先輩の櫻井さん(43期)とか亡くなられた池田さんがおられて、非常に明るい良い雰囲気でしたので、以降出来る限り同窓会には参加するようにしています。皆さんも友達を誘って益々隆盛な会にしていきたいと思っています。

(注) ゴルフの話もされましたが割愛させていただきました。中曽根さんのゴルフの腕前はプロ並みで、ハンディも2までいき(現在は7.2)、北海道代表で全国大会にも出られたそうです。

◀ 総会出席者からの近況報告 ▶

(報告順で敬称略)

大谷文昭 (65期) 今年、2月にマレーシアのクワラルンプールに大学時代の応援団の仲間と遊びに行ってきました。大変楽しい旅だったものですからつい68歳であることを忘れてはしゃぎ、照り返しで45℃位ある中でゴルフをして、千歳に帰ってきたら-8℃で風邪を引きました。病院に行ったら肝臓の状態を示すGOT、γ-GTPの値が30~40が正常値に対して137と155ありました。先生からは劇症肝炎で入院だと言われ、その他中性脂肪とか尿酸値などの問題もあり、やはり60代後半になると色々なところが不具合になってきました。いずれにしろ歳を忘れてはしゃぎすぎるのはイカン、ほどほどにしなくてはいけないと肝に銘じたところです。

最近、上田高校に関して感動することが2つありました。その1つは上田高校の正門を観た多くの友人・知人から感動の声を聞いたことです。あのように濠があって正門から続く塀に囲まれた学校は全国どこにも無く、誇りに思っていて良いと強く感じました。2つ目は山極勝三郎の「うさぎ追いし」の映画を観て感動しました。今更ながら上田は素晴らしい街であり、上田高校も素晴らしい高校だと思いを新たにしているところです。

金井貴生 (94期) この中では一番若い世代ですが、実は父親も上田高校OBで、今電話で聞いたところ中曽根さんと同じ51期の卒業だそうです。同窓会には昨年から参加させていただいていますが、何とかこの北海道で母校に関わっていきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

北澤多喜雄 (73期) 60歳になって何が変わったということは特に無いんですが、現在勤めている酪農学園は一応65歳まで勤めることができるので、今まで通り学生に教育したり、実験したり、論文書いたりする生活をあと5年位続けられるのかと思っています。

同窓会との関わりは25年程前に、同じ酪農学園で教鞭を執っていた菅沼先生(48期)の紹介で参加したの

が始まりで、以来事務方を引き受けていますが、今後とも同窓会発展のためにサポートしていきたいと考えています。特に会の存在・活動を外にアピールしていくためには会報が強力な手段になると思っています。自分自身も書くことは苦にならない質なので、年2回しっかりと外に出しても恥ずかしくない内容のものを作りたいと思っています。当会が“限界同窓会”にならないように金井君などの若い力の協力をお願いし、かつ諸先輩のご活躍もお願いいたします。

平尾三郎 (51期) 山極勝三郎という名前が出てきたのでそれに関連した話をします。家を貸していた同期の丸山イイ君と赤松小三郎記念館を観に行こうとしたら、途中で山極勝三郎の展覧会をしていたので見学したところ、彼の結婚に際して仲人をしたのが正木直太朗と言って私の母方の祖父でした。正木直太朗は先ほど話に出てきた上田高校の前身である上田変則中学校の更に前の小県郡の中学校の校長をした人です。明治維新の時には上田藩の小姓をやっている、後に今の東京学芸大学を出て長野県に戻ってきて県の教育に尽力したと聞いています。小県郡の中学校を創るにあたって地元での反対は大きかったのですが、日本は資源が乏しい国であって人材を育成しなければならないとの郡会の意見などにも後押しされて実現したようです。そんな歴史も含めて上田や上田高校の歴史を紐解いてみても面白いと思います。

中曽根公 (51期) 高校時代の話をする。3年の時に柔道部の道場ができました。それまでは染谷ヶ丘高校の前にある警察署に行ったり、あるいは蚕業高校の道場に行って稽古をしていました。道場が出来て非常に嬉しくて、私はほとんど午後からは道場で寝ていたような具合でした。我々の時代は運動が盛んでかつ強く、サッカーとかハンドボールは予選を勝ち抜いて総体に出場していましたし、野球も決勝で松商に負けたものの甲子園が手に届くところまで行きました。そうした運動の主力の連中が私のクラスには大勢いて、試験になると私の周りに集まるんですね。私の成績は1年の時はクラスで中位でしたが2年になると何故かトップクラスになり、先生方の中では、あいつはカンニングをしているんだろうというような噂まで立ち、試験の時にはもう一人先生が来て、私の後ろで監視するといったこともありました。高校時代は色々悪いことをしたものです。

沓掛高夫 (63期) 私の生まれは上田市の昔で言う浦里村です。北海道になぜ来たかということをお話します。学生時代、4年の卒業の年にカニ族となって北海道を旅行しました。汽車の中で新婚旅行の夫婦に会いまして、その夫婦はエリモに住んでいたんですが、私がエリモを回ったときに偶然にもその夫婦に再会しました。そして今日は是非とも我が家に泊まれと勧められ一晩厄介になりました。その時、北海道はどうしてこうもおおらかで他人を受け入れてくれる地なんだろうと感心しました。長野ではあれをやったらダメ、これをやったらダメと束縛されていたもんですから、「ああ、こういう生き方をしたいな」と思い、北海道が大好きになりました。そんなことで北海道に来て、結婚もして50年が過ぎました。

福田安矩 (64期) 東京に就職して、北海道に来て何が良かったかという話をススキノですね。東京の新宿とは全然違ったですね。たまたま北海道に来て、結婚して、転勤願を出して北海道人となって41年経ちました。私の3分の2が北海道人生です。これからもこの会を皆さんと共に元気付けていきたいと思っています。

山岸宏一 (61期) 父親が長野県の公務員で林務部に所属していたんですが、私も大学では山の仕事に関わる学部を出て、以来 50 年、木の仕事で飯を食ってきました。人生の 8 割を北海道に居て、第二の故郷と言うよりはすっかり北海道人になっています。

矢嶋俊彦 (59期) 大学を出て、歯学部の助手になって、米国に行かされ、帰ってきたら今度は東日本学園大学（現北海道医療大学）で歯学部を創っているので行って来いと教授に簡単に言われてこの地にやって来たのが 1982 年の今から 35 年前で、戻してくれるのかと思っていたらそのまま居続けることになり現在に至っています。その時の学生の中に今は亡くなられた池田先輩の息子がいて、その伝手で先輩と会ったのが同窓会に参加するきっかけとなりました。

私は 6 人兄弟で 5 人が男で全て上田中学・上田高校で、高校に入ったら「お前の兄貴は勉強できたがお前はできないな」といつも言われていました。特に竹内啓太郎先生には卒業した兄が酒の席で喧嘩したらしく、そのとぼっちりで「お前は何だ！」と睨まれていて苦手で、勿論漢文は嫌いでした。私の同期も東大に何人も入っているんですが、連中は違うんですね。1 回読むと頭に入ってしまうんです。数学の先生なんか逆にやり込められたりなんかしているんです。ある時、その連中が答案用紙に万年筆で書いているのを先生が見て、「お前間違えたら消さなきゃならないのに」と言うと、「私は間違えませんから」と平気で言うような連中でした。運動会とか、嫌々出た応援の練習なんかを懐かしく思い出します。

中村今朝良 (65期) 中曽根先輩の想いと一緒くただ北海道の雄大さに憧れて北大に来ました。北海道に来るときに上野から夜行列車に乗ったんですが、受験生とおぼしき女の子がいて、名前は陽子と言って話をしながら一緒に札幌まで来ました。それはそれで終わったのですが、大学に入って 2 年目に北大で殺人事件がありまして、殺されたのがその娘だったんですね。その時はたいへん吃驚した思い出があります。

3 年ほど前から走ることに興味を覚えて、先日の 14 日も寒い中でしたが苫小牧のノーザンホースでマラソン大会があり、ハーフ 21km を走りました。この時は頭と体のコントロールが出来ずに失敗しました。前半速く走り過ぎて後半バテてしまい、20km を過ぎてさあこれからラストスパートだと、気力はあっても脚が動かないんですね。6 月 4 日にも千歳で JAL 主催のマラソン大会があり、これはフルで 42.195km を走ろうとエントリーしていますが、この時は頭が命令することを体が付いていくように走り、出来れば 5 時間で走りたいと思っています。

杉山孝治 (66期) 昨年の足寄行き幹事をやりまして大変な目に遭い、しかし貴重な経験をしました。向こうは雨、嵐だったんですが、札幌に帰ってくると星空で、なんと札幌が平和で良い街なんだろうと思うと共に、道東とか道北が本当の北海道なんだろうとも思いました。

高校に入ったときはちょうどプールが造られた時で、3 年間水泳部で頑張りました。勿論水泳部は出来立てのほやほやで、100m をようやく泳げるようになったばかりの 1 年目の大会では 8 人全員がびりっけつでした。

高校を卒業して東京の大学を出て、損害保険会社に勤めました。北海道に来た経緯というのは、勤めていた会社が北洋銀行の幹事会社をやっている、拓銀が破たんした折の北洋銀行をフォローするために札幌支店に本社から人材を派遣することになり、ちょうど私の娘が北大に入ったときでしたのでそれなら杉山を遣れということになって転勤してこちらに来て早や 20 年近くなります。

先程の中曽根先輩の話の中で2つほど保険に関係することが出たんでその話をします。1つは、中曽根先輩は損害保険業界のブラックリストに載っているんですね。ホールインワンを3回もやる人はリストに載るんですよ。まあ、悪いブラックリストではないんで、身近にこんな人がいたのかと羨ましい限りです。今、私は保険会社を卒業して加森観光がやっている代理店で仕事をしていますが、その仕事に就いたときにはちょうどタ張りゾートが破綻し、使用管理が加森観光に委託されたときで、以来10年間にわたって保険の方で施設のバックアップをしてきました。あそこには石炭の歴史村があって、日本の産業遺産としては素晴らしいもので一見の価値があると思っています。

清澤通俊 (64期) 3月末から4月中旬にかけて四国の八十八カ所を巡ってきました。1200キロをすべて歩くと50日も掛かるらしいですが、とてもそれだけの自信は無く、適当に電車・バス・タクシーも利用して、ちょうど3週間掛けて回り切りました。それでも1日平均15kmほどを歩きましたが、概してお寺は修行目的や津波を避ける意味もあって山の上にあることから、きつい登り降りもあり、札幌に帰った今も疲れが残っている感じです。

特に信心があってやろうと思いたった訳ではなく、みんながやるという遍路を自分も60代の最後に体験してみようという軽い気持ちから出発したわけですが、歩いてみると、北国とは違った豊かな自然があり、気持ちの良い挨拶が交わされ、遍路を受入れてくれる親切な人々が育む文化が息づいていることを実感した反面、その裏返しとしての地方の疲弊という現実も歩いてこそ分かった旅でした。

1ヶ寺2回、計八十八×2回も般若心経を唱えてみると、やはりなにかしら神聖な領域に入った感もこれありで、歩くペースでいろいろ考え、感じながら過ごした3週間でした。

西澤伸志 (68期) 医学部を卒業して医学の研究を東京の大学でやっていたときに、岩見沢で内科医院を開業していた女房の父親が亡くなって、女房の懇願で北海道に来ました。それまでは癌をやっていたんですがそれも出来なくなったので何をやろうかと考えまして、後世の人に役に立つことをしたいという目標があったものですから、耳鼻咽喉科の治療に携わりながら北海道特有のアレルギーである白樺の花粉の研究を20年近くやっています。

スポーツでは大学に入って柔道をやりましたが、スピードが伴わず初段になるのに3年掛かり限界を感じました。スキーもテニスもやっています。

ピアニストになりたかった女房と一緒に良かったことの一つが私もピアノを弾くようになったことです。岩見沢教育大学でピアノを教えてもらって8年目になります。ピアノを弾くことは老化防止に良いんですね。朝30分、昼休みにも30分、毎日ピアノに向かっています。

(注) 定期総会では出席者から3分ほどの近況報告をいただきました。これはその話を纏めたものです。なお、定期総会に参加された矢島崇さん(67期)は残念ながら所用で中途退席されました。

《 総会に寄せられた欠席者からの一言 》

(敬称略)

齊藤昭夫 (46期) 町内会連合会のボランティアが多忙のため残念です。任期はあと一年です。

菅沼英二 (48期) 5月20日の総会に出席し、皆様にお会い出来ることを楽しみにしています。会報第4号をお送り下さりありがとうございます。会員も増え、寄稿者も増え、読むのが楽しみです。 (注) 菅沼さんは当日に体調を崩されて残念ながら欠席されました。

増田武夫 (61期) 都合により出席できず申し訳ありません。同窓会報も立派になり、役員の方々の御苦勞の賜です。総会のご盛会をお祈りします。

平等志成 (62期) 陸別町の地域活性化の仕事をして居ります。総会当日は事業日程が入って居り、残念ですが今回は欠席させていただきます。 (注) 平等さんはこの3月に新たに会員になっていただきました。

吉川友二 (81期) 感謝しています。4月の終わりにまた酪農学園に行きます。よろしくお祈りします。

濱 豊 (82期) 公私共に多忙の為、誠に残念ですが欠席させて頂きたいと存じます。ご盛会を心よりお祈り申し上げます。

松本美生 (87期) 会報第4号の誌上講演を興味深く拝読いたしました。毎回ありがとうございます。

白石英才 (90期) 盛会を祈念しております。新年度から法人理事として奉職することになりなかなか休めません……。また次回楽しみにしております。

山田慶一 (102期) 出席できず申し訳ありません。

総会のスナップ写真



今回は、76期・石黒さんに前号に引き続き、いかに建築設計の道を行ってきたかその華々しい活躍の話と、67期・矢島崇さんの北大林学科の教授として森林生態学を究める傍らで温めてきた森や樹木への想いを語っていただきました。

建築の創作時代：“建てる技術の探求（第二部）”

76期 石黒浩一郎 さん
(株) ISA アーキテクト 代表取締役



1992年にニューヨークから帰国し大成建設設計部に復職しました。当時はバブル直後の不況時で公共投資の視点から全国に「市民ドーム」が数多く企画・建設された時期でした。札幌市においても丘珠空港の隣接地に市民ドーム（のちに“つどうむ”と命名）の計画があり、この設計・建設提案コンペに参加することになりました。市民ドームは100mを超える大空間を無柱で架構するので高度な構造・施工技術が必要になります。それを反映して当時の市民ドームは単純な円形ドームばかりで目をひくデザインはほとんどありませんでした。また札幌のような寒冷多雪地にはそれまでに大規模ドームの事例がなく、“つどうむ”のコンペでは斬新なデザインと積雪処理が主たる課題となりました。提案の核となったのは、敷地に常に滑走路と並行に強い風が吹いているという気象条件でした。テフロン幕の屋根を谷状に形成しこれを恒風向と平行にしたことで、幕屋根の谷底に強風を発生させ、雪を吹き飛ばすシステムとしました。これは同時に子供たちに「カメラ」と呼ばれて親しまれているユニークな形態となりました。この提案は幸運にも実現に至り、竣工後20年を経過して技術提案の正しさも実証されました。同時に「環境を読んでかたちにする。」というデザインと技術の架け橋を発見した私の記念すべきプロジェクトになりました。



■札幌コミュニティドーム“つどうむ” “ゴルマ”や雪まつりなど竣工後20年にわたり市民に親しまれています。

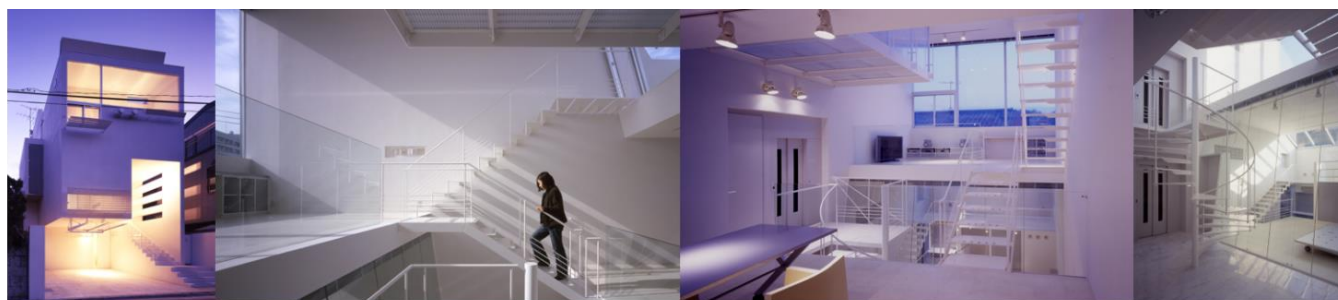
“つどうむ”の建設中に2002年FIFAワールドカップの開催が決まり札幌市も会場に選定されました。市民の間ではこれ以前からプロ野球用の本格的ドームへの要望も強かったことから、札幌市はFIFAとプロ野球の公式戦が可能なスーパードームの実現を目指して、設計施工コンペを開催しました。世界でも類例のない“よくばり”施設の実現に向けて、建築家の原広司先生を中心に大成建設と竹中工務店というライバル企業がJVを組むという異例の体制でコンペに臨みました。社運をかけたプロジェクトでしたが、ライバル同士がうまく協働できるはずもなく大変難しい仕事になりましたが、最終的には原先生の求心力によりなんとかかまとまり、このコンペも第一席を獲得しました。

原広司先生は建築界の歴史に残る巨匠です。建築だけでなく集落調査や集合論などの深く幅広い知見にたたれて創作活動をしているいわば現代の“建築仙人”です。大阪の梅田スカイビルや京都駅など原作品をご存知の方も多いかと思います。札幌ドームのコンペの6か月間、寝食を共にさせていただき一緒に建築に立ち向かった経験は、KPFのペダーセンやザハとも違うより親密で強烈な体験でした。要求された過酷な設計条件に対して、原先生は「複素構造=Complex Dome」という建築的な概念を提出し、技術者からの技術的提案を一つの建築へと統合していきました。それは難解な数学の問題をエレガントに解いていくような美しさがあり、真の建築家の力をあらためて目の当たりにしたコンペでした。



■原広司先生と札幌ドーム。天然芝コートがドームに入るシーンは未来的です。ずっと日ハムに使ってほしいです。

今でもそうですが、大手建設会社の設計部は大変優秀な人材がそろっています。技術研究所などの高度な技術支援をうけ超高層ビルや大規模開発などの設計を得意としています。半面、建築の哲学的な側面を追求することは利益追求の企業活動と相反する矛盾があります。これはニューヨーク留学以来、自分の心の底に澱のようにたまっていた不満でしたが、原先生との濃密なコンペ生活を通じていよいよ抑えることのできないものになっていました。結局、建築の設計をより広く深い視点で追求してみたいという思いに逆らうことができずに、大成建設を辞することになりました。因縁ともいえますが、このときの社長は、新入社員の時に現場所長としてお世話になった平島治氏でした。辞職の報告に行ったときに最初はひどく怒られましたが、最後は「お前の人生だから大成での経験を活かして世の中の役にたつようにしっかりやりなさい。」と送り出していただきました。また、つどうむ・札幌ドームの両現場で苦楽をともにした現場監督は現在大成建設札幌支店長にまで昇進され、変わらぬご厚誼をいただいています。“不肖の社員”としては本当にありがたいことです。



■駒沢公園の家 私が初めて手掛けた住宅です。間仕切りはすべてガラスで立体的なワンルームのような住宅です。

さて、希望通り自分の設計事務所を開設したものの、当たり前ですがすぐに仕事の依頼はありませんでした。原先生の事務所のお手伝いしながら生き延びている中で、駒沢公園の近くで住宅の設計をすることになりました。通常の建築家のキャリアでは、住宅を最初として徐々に大規模な建物の設計することになるのですが、私の場合はその逆で、札幌ドームの設計の直後に住宅設計をするのですから自分としても住宅特有の問題に対応できるか大いに不安でした。このことはクライアントにも正直に説明しましたが、「そういう普通でない建築家

を探していた。」というあたたかな言葉をいただきました。一年の間、他の仕事は一切引き受けず集中したこともあり、現在の自分からみても圧倒的な設計密度をもつ住宅ができあがりました。東京建築賞をはじめ多くの建築賞を受賞し、国内外の著名住宅雑誌にも掲載された有名住宅となりましたが、原先生からは「やりたいことが多すぎて戦艦のような住宅になっているね。」という核心的な批評を頂戴しました。



■高円寺南テラスハウスと千葉の家 雑誌やTVで何回も紹介されました。話題性を優先していた時代の作品です。

駒沢公園の家を機会に住宅設計の依頼がコンスタントに入るようになりました。今から考えればまことに恥ずかしい話ですが、依頼のなかから自分の思い通りのデザインが実現できるクライアントの仕事だけを選び、ひきうけていました。その効果？もあってか、竣工した住宅はどれも話題となり、世界の有名建築家を招待して開催される住宅展にも招待されるまでになりました。事務所も千駄ヶ谷に移し、スタッフも増やして意気揚々の毎日でした。そんなある日、原先生からアトリエに来るようとお話がありました。その時の先生の言葉が私の人生を変えたのでした。それは「石黒君は社会的に大変なコストをかけて育成された建築家だ。その人が住宅という個人的な作品の枠のなかで生きていてよいのか？」というものでした。確かに、そのころは新しい住宅を構想するときには、この空間はこのように写真をとれば雑誌うけすると考えている功利的な自分がいました。このお話と前後したと思います。つどうむ・札幌ドームのコンペの時に札幌の地元設計事務所としてJVに参加したアトリエブंकから「公共建築のコンペを手伝ってほしい。」というお話をいただきました。熟慮の末にこのお誘いに参加することにしました。



■釧路こども遊学館 科学館とあそびの空間とが複合した建物です。北海道建築賞と公共建築賞を受賞しました。

アトリエブंकは40人程度の所員の中規模設計事務所です。道内の公共建築を手掛けています。コンペに招待され、幸いにも実現したプロジェクトは釧路市の科学館でのちに“こども遊学館”と命名されました。このコンペでは、夏期は冷涼・曇天、冬期は寒冷・晴天という釧路の気候特性に注目し、外壁全体がガラスの建築を提案しました。北海道では当時全面ガラス張りの建築は前例がなく、当初は驚かれましたが、精密な温熱シミュレーションを駆使し省エネにすぐれた環境建築であることを実証したことで、多くの方々の賛同を得ることができました。この建物の実設計の終了後は東京での活動に戻るつもりでしたが、それまでに参加したコンペやプロポーザルが次々と当選し、結局のところ11年にわたりアトリエブंकに長居することになりました。この間、原先生のお言葉を忘れずに、デザインの責任者として建てる技術を探求する建築家集団を目指し

ました。朝から晩まで若手社員と建築設計の TIPS（こつ）を開発・伝授した多忙で充実した毎日でした。また、この間、上田高校の同級生である宮下医院・宮下暢夫先生のクリニックとご自宅を設計できたのも楽しい思い出です。



■ 中標津東小学校・福島町青函トンネル記念館・宮下医院 アトリエブנקの若手所員と一緒に創り続けた時代です。

アトリエブנקで最後の仕事となったのは「函館市縄文文化交流センター」の設計です。ご案内の方も多いかと思いますが、この建物は現在北海道で唯一の国宝である縄文土偶【カックウ】を所蔵する博物館です。今から 3800 年ほど前に作製されたと考えられている【カックウ】は大英博物館でも展示された経歴もある驚異的な遺物です。その彼（彼女？）の家を設計することになり、間近に実物を見る機会を得ました。あまりの芸術的な力を目の当たりにして、どうしたら【カックウ】の家を創れるだろうかと自問しつづけた毎日でした。



■ 国宝中空土偶と函館市縄文文化交流センター それまでとは違う手法で“カックウ”の家をおおらかに作りしました。

建物は杉板をランダムに張り付けて型枠としたコンクリートを使い、曲面壁で構成したものになりました。これは縄文時代の悠久な時間を暗示するとともに人間の手の痕跡を残したいと考えたからです。“つどうむ”以来ずっと追求してきた軽く・高度な技術とは異なる、重く・おおらかな技術による建築です。建築とは詰まる所、「建てる技術の探求」であり、それには軽く高度な技術（テクトニック）と重くおおらかな技術（ステレオとミック）による二つの潮流があるということは、コロンビア大学の碩学フランプトンから学んだことですが、ようやくこれらの二つの技術の探求が実践できたという喜びがありました。



■ ニセコの作品群 ヒラフ中心地区に12の建築が実現しています。クライアントはほとんどが外国の方です。

現在は大通公園の近くに事務所を構え、一人で活動しています。動物にも好きな巣のサイズがあるように私には個人の事務所が性に合っているようです。仕事は海外からの不動産投資が盛んなニセコエリアに集中して

います。後志地方のローカルな場所ですが、多くの著名建築家が参入している国際的舞臺となっています。この場所で、長年にわたり培った人脈と知見を活かし、「建てる技術の探求」をさらに進めたいと考えています。長い間拙文におつきあいいただき本当にありがとうございました。

森を歩き、森の成立・発達の仕事と動きを解き明かしながら

67期 矢島 崇 さん
(前 北海道大学 農学部林学科教授)



北大に入学して以来、卒業後もそのまま北海道に住み着くこととなったことは、自分でも意外でした。そしてそれはそのまま、45年間にも及ぶ森との付き合いだったのです。

大学時代は、何かのきっかけを得て山歩きばかりしていた。教養課程ののちに進学先として農学部林学科を選んだのは、高校生の頃からの予定の行動ではなく、まして何か目標があったのでもなく、たぶん漠然と山と森が好きだったためです。そこならば山歩き、森歩きで思う存分に遊べるであろう。なにしろ、聞き集めた話しによると、林学科は「ヒマリん」と言われていたのです。

このような戯けた期待はたいてい見事に裏切られるものですが、その期待が的中したところが悪運というものです。山に行っているのなら講義など欠席してもよろしい。その方が勉強になる。臆面もなくそうおっしゃる先生方が少なからずいました。いい時代だった、ということなのでしょう。

ただし必修の単位に卒業論文というのがあって、これは適当に誤魔化すようなものではなく、学科の最重要イベントが卒論発表会という感じですから、遊んでばかりでは恥を掻く。全員必須のプレゼンテーションに向けてきちんと取り組まないといけな。その頃の4年次には他に履修すべき講義も用意されておらず、時間割表もほぼ真っ白です。1年間、ふんだんにある時間をすべて卒論に注げという学科の方針は、ある意味厳しい。

うっそうと暗い森も明るい森もそれぞれ気持ちが良い。森の中に入ると落ち着く。色々な生き物とも会える。大きな樹木に圧倒される。小さな樹木の将来を思うのも嬉しい。漫然とそこを愉しんでいるだけでは済まなくなり、森を研究の対象として見ていかなければならなくなりました。卒論を経て惰性で大学院に進み、運良く助手に採用されて、以来昨年の退職まで、森との付き合いはずいぶんと長いものになりました。それでも辛くはなかったし、飽きもしなかった。



針葉樹・広葉樹が混じる天然林、北海道の森のあるべき姿(知床)

勉強することになったのは造林学という範疇で、森造りのための基礎的・技術的研究を行っているところで

した。そのなかでも私は、森林生態学あるいは樹木生態学に関心を持って、北海道を中心として天然林・人工林を含め、様々な森の成立・発達の様子と動きを解き明かしたいと思ったのです。樹木は無限に育つはずもない生き物なのでいずれ枯れるし、すると一部とはいえ森は壊れる。だから発達のあとには必ず攪乱と再生が生じます。振り返ってみれば知り得たものは僅かだったのですが、森が動くそのプロセスで主役を演じる樹木という生き物に大いに惹かれていたことで、愉しんできました。

樹木とはそもそもどんな生き物なのだろう、わけのわからないことを思いながら自分で調べてみると、まずは寿命の長い生き物でした。ポピュラーな針葉樹エゾマツやトドマツの場合、200年から300年ほど生きる個体は珍しくはない。300年を大きく超えるものは少ないようです。大きく太く育てて用材としての価値も高い広葉樹類ミズナラ、ハリギリなどは、北海道の天然林のなかで300年から400年生き延びることが出来る。私が出会った最高齢の広葉樹は約450歳のミズナラでしたが、これなどは戦国時代に森の地面に転げたドングリから芽生えたのですから畏敬の念も沸きます。寿命の短い樹種もありますが、総じて極めて長寿命と言って良い。

どんな生き物か？と思いを馳せるとき、やはり植物特有の重要な制約を無視できません。樹木であれ草であれ、植物は光合成により生きています。光合成という生理反応には光が必要ですがそれだけではなく、およそ摂氏5度以上の温度が得られないと生じない。おおざっぱに言えば熱帯であろうと極地であろうと、植物はその制約のなかで生きているのです。

摂氏5度以上です。その数字が意味すること。北海道で植物が光合成を行える期間は、1年のなかで半分しかないこととなります。植物にとって光合成は「生産」の手段です。一方、生き物である限り樹木も呼吸をします。呼吸は「消費」ですね。話を簡単にして少し乱暴に言えば、呼吸は植物の表面すべてで生じる。光や温度によって大きく変動することはない。とすれば、巨大な構造物である樹木は、その表面積も巨大な故に、呼吸による消費も大きい。光合成が出来ない低温条件や光不足条件のなかでも、消費は続いている。生産が消費に追いつかなければ、その先には枯死が待っているというしかない。おそらく樹木は、そのような条件のなかで、ぎりぎり無駄を省いた生き方をしているに違いないと、私には思えるわけです。



植栽から100年経った人工林の風格(野幌)

そして解っていてもつい、途方に暮れてしまう樹木の特性がもう一つあります。植物は移動できません。蝦夷地の奥地に芽生えたドングリは、芽生えたそこで育ち、そこで一生を終えるしかない。450年という時間のなかで生存に関わる危機が何もないはずはなく、逃げることも出来ず、危険をやり過ぎときには耐え続けなければならない。失敗すれば枯れゆくだけです。

常緑樹と落葉樹というカテゴリーもよく耳にすると思います。落葉広葉樹と呼ばれることも多い。秋にきれいに紅葉をし、紅葉した葉が枝を離れて地面に落ちる。冬になるとすっかり葉がなくて、裸の樹木が吹雪に震えている。

エゾマツやトドマツなどの針葉樹は常緑なので黒々と葉を付けていて、夏よりも存在感があります。北海道に住むものにとって、そんな景色は普通すぎて、当たり前すぎて、特に注意を引くこと

はありません。

「厳しい冬を迎えて（寒さに耐えかねて）すっかり葉が落ちてしまいました」

というようなナレーションを聞くと、私は些か面白くない。寒さと戦い、負けた結果で樹木が裸にされたとは思っていないからです。落葉性とは、そんなものではありません。

半年の間、ほぼ光合成が出来ない低温条件下に晒されます。葉は光合成を行うためにありますが、光合成が出来ないのに、光合成のための器官を枝に付けているのは無駄です。低温で葉が凍ることもある。吹雪と言われるような強風も必ず襲ってくる。それでなくても葉は蒸散によって水分を排出し樹木を乾燥させる。しかも大きな表面積で呼吸をする。広葉樹類の葉などはひとたまりもなくぼろぼろになりそうです。控えめに言っても、必ず大きなダメージを被ることは想像に難くない。葉を着けて冬を越すなど、リスクが大きすぎる。

針葉樹は葉を着けて冬を越しますが、針のような葉で表面積を小さくして樹木のなかの乾燥を回避し、硬く、短くさせて雪や強風に対して物理的に耐えうる形を持っています。気温が5度を上回るような暖かい日は冬でもあり得るし、秋の終わりや春の初めなどにはまとまった暖かい日もありそう。常に葉を着けていればそこですかさず光合成が可能なのです。針葉樹はそういう葉の形態で常緑性を可能にしているのでしょう。

常緑の広葉樹は西日本以南に多くの種類があるのですが、信州や北海道の人にはあまりなじみがないかもしれません。観葉植物のゴムノキとか、低木のシャクナゲを思い出して下さい。どちらも楕円形の葉を持つ広葉樹ですが、葉は分厚くて硬い。

常緑の植物は、一度作った葉を複数年使って光合成をする。何年も使うために、その間のリスクに耐えうるように、しっかりとした丈夫な葉を用意します。従って厚くて硬い。それに引き替え、北海道に多くある落葉広葉樹の葉は頼りないほど薄くて、ちょっとした風にもひらひらとなびく。落葉することが前提なので、春から秋まで、半年間だけ光合成をしてくれればいい。つまり、コストを最小限に抑えて、使い捨てる体制なのです。ゴムノキのような分厚く硬い頑丈な葉を造ったところで、北国の冬は甘くない。何年も使うために大きく投資した葉が損なわれれば、損失は計り知れない。リスクが大きすぎる。だから使い捨てるのです。秋に紅葉したときに樹木は、葉に残っている光合成産物を枝に取り込んで回収します。そののちに切り離して捨てる。紅葉は落葉の準備であり、無駄を省く手順なのです。

いまでも時折は森に入って散策を愉しんでいます。クセになって染みついていますから、樹木の生活ぶりを覗くような目で歩いている気がします。季節現象を診て、その積み重ねである森の変化を思う。どんな由来があって今のこの森があるのか、10年後、50年後、100年後にはどうなっているのだろうか？凄いい台風が来て森は壊滅するかもしれない。それでも再生する逞しさが森にはある。300年を生きようとする樹木なのだから、たいていの事態は想定内に違いない。

紅葉と新緑は美しい。冬は殺風景だ。森、あるいは樹木を見て誰もがそう感じる。妄想のなかで森を壊したり再生させたり、樹木同士の競争を勝手に面白がっている人などはあまりいないと思う。それでも樹木は生き



春を待つミズナラ、
樹齢不詳の偉容(母子里)

物です。リスクを回避する。無駄をなくす。それがうまく出来てはじめて、300年も400年も生きることが出来る。森は風景の静止画ではなく、絶えず変化している生き物の集まりです。そう思って森を歩かないともったいない。北国で生きてゆくための工夫と適応を意識すると、紅葉や新緑を目にしたとき、美しい以上の何かを発見できるかもしれません。

それで何か得することもないでしょうけれど。

《みなさんこんにちは！！》

①よく まあ おいでやした！

46期 斎藤昭夫さん（札幌市在住）



私は今年88歳の米寿を迎えました。足腰は大分衰えましたが、続けてきた札幌市豊平区平岸地区の町内会連合会のボランティアを来年3月の任期までは何とか頑張りたいと思っています。

私の住む豊平区は市の南西部に位置し、都心に近いため22万人が住む人口が多い区です。区内には札幌ドームや総合体育館「きたえーる」などのスポーツ施設が多く、冬期を中心に国内外のアスリートや観光客が年々増えています。そこで平成27年、豊平区は2026年冬季オリンピックの招致を見据えて、役所と地域さらに企業、商店等と連携して、豊平区を訪れる方々（来豊者）に対する「おもてなし」の取り組みを展開しようと平成27年度から「TOYOHIRA おもてなし特区」推進事業という、行政としては大変斬新な取り組みを始めました。

斎藤さんの活躍の場「平岸会館」の前で

取り組みでは、先ずおもてなし憲章を制定し、同時におもてなし特区の宣言を行い、28年度からは、おもてなしをテーマにした区民運動を展開し、住民のおもてなし機運を醸成するため講演会や研修会、交流会などを区内全域で積極的に行っています。そんな中で先日私が出た勉強会では、お客様をお迎えする第一声について面白い話し合いがありました。全国共通語でウェルカムは、「いらっしゃいませ、ようこそ豊平区へ」などですが、京都弁の「おいでやす」のような歓迎する方言は北海道弁にはなかったのではないかと。昔は客に対しても「おお来たか！ 元気だったか、よく来たな！ やあ どうもどうも！」といった調子だった。今でも高齢者の中には敬語表現が出来ない人が少なくないという人もいました。

豊平区のおもてなしの啓発も息の長いキャンペーンになりそうです。ところで、わが故郷信州弁のお迎えの敬語は？ 70年以上前明治生まれの祖母や母親が畳に座ってお辞儀をしながら客をむかえた時に言っていた言葉は「よく まあ おいでやした」でした。

<追加原稿>8月29日に、「みなさんこんにちは!!」に寄稿していただいた斎藤昭夫さんを町内活動の拠点である平岸会館に訪ねました。斎藤さんは仕事を辞めてから町内活動に関わるようになり、現在は平岸東園通町内会会長および平岸地区町内会連合会会長をされていて大変忙しい身で、上田高校同窓会の集まりにもなかなか参加できずに申し訳ないと言われていました。寄稿文にも書かれていましたが、斎藤さんは豊平区が取り組む「TOYOHIRA おもてなし特区」事業の推進母体である「おもてなし部会」の部会長も務めており、今年の2月に開催された冬季アジア大会でも雪像やアイスキャンドルの設置、おもてなしブースの開設、炊き出し協力などに取り組んだそうです。(文・64期 清澤通俊)

(仮称) TOYOHIRA 「おもてなし」区 推進事業 (2015~2019の5年間:中期実施計画の新規事業) 資料3

2026年の冬季オリンピック・パラリンピックの招致を見据え、地域の機運の醸成と活性化を図るため、豊平区を来訪する方々(「来賓者」)に対し、地域・企業・商店街等と連携してさまざまな「おもてなし」の取り組みを展開します。

「来賓者をおもてなし」
 ◆豊平区には、主要なスポーツ施設があり、年間を通じて、国内外から多くの「来賓者」がある。
 <スポーツ施設の動員数>
 札幌ドーム 年間平均230万人 開業12年3,000万人
 きたえる 年間目標64万5千人

◆今後も、冬季アジア札幌大会をはじめ、多くの国際大会の開催が予定。
 <国際大会の開催>
 2016年 平昌五輪アイスホッケー1次予選(4カ国)
 2017年 冬季アジア札幌大会(30カ国・選手1,200人)
 2018年 ラグビーワールドカップ
 2020年 TOKYOオリンピック・サッカー予選

★2026年 冬季オリンピック・パラリンピック
 開会式・札幌ドーム
 選手約4,500人/メディアセンター1万人

↓
 オリンピックの地元として、豊平ができること
 ↓
 おもてなし
 ↓
 特区
 ↓
 地域の機運の醸成と活性化を目指す

事業概要

区民協議会を中心に幅広く議論

おもてなし「憲章の制定」と「特区宣言」
 冬季五輪に向けた良の長い取り組みとしていくため、その基所として「札幌市民憲章」「五輪憲章」に倣った「憲章」を制定、区民の共通認識として確立していく。

目標は五輪での提供

おもてなし「食の新定番」の開発・活用
 豊平の歴史や文化を踏まえながら、TOYOHIRAの「新名物」「新定番」「新土産」「ご当地もの」等を開発、その共通レシピを公開し、市内の協力店を拡大していく。

2017は特区元年

おもてなし「区民運動」の展開
 特区宣言と同時に、おもてなしをテーマとする区民運動をスタート、担い手の育成、街並みづくりなどにより、おもてなしの機運を醸成し、地域の取り組みを拡大していく。
 ★おもてなし大使の養成 ★小中学生への普及活動
 ★丹草・桜丘中心に地下鉄・施設でのPR等
 ★とよひらMAMA-LAND事業との連携

スケジュール(2015~2019)

2015	2016	2017	2018	2019
五輪の開催計画策定 平昌五輪アイスホッケー予選		冬季アジア大会	平昌五輪	IOC2026開催地決定
		区民協「おもてなし部会」設置	憲章の制定 新定番の決定	特区の宣言 区民運動の展開
				うぐいし・CJF

斎藤さんが携わる“豊平区おもてなし特区推進事業”の概要パンフレット

同窓会本部通信

◆ 29 年度定時総会

5 月 27 日（土）に、定時総会が開催されました。

平成 28 年度の事業の報告・決算の承認、新役員を選考する委員の選任、120 周年記念事業実行委員会の設置、上原理事の辞任・丸山暢久氏の理事選任が決議されました。また、28 年度公益目的支出計画実施報告、29 年度の事業計画・予算について説明・報告がなされました。

120 周年は 2020 年、東京オリンピックの年にあたります。先行して校史編纂が行われていますが、記念事業の内容は今後理事会等で決定されていくこととなります。



◆ 松尾祭

生徒会最大行事である平成 29 年度第 60 回松尾祭が 6 月 30 日（金）の合唱コンクール、前夜祭から 7 月 1 日（土）・2 日（日）の一般公開と後夜祭、7 月 3 日（月）の片づけ・閉祭式までの 4 日間の日程で行われました。

「我楽しむ故に我在り」をテーマとして、班活や全校製作、合唱練習、そしてアンデパンダン製作に全日制・定時制生徒が一丸となって取組み、記念すべき第 60 回を迎えました。

豪雨の夕立もありましたが、展示・各団体発表のほか、ダンスコンテスト、定時制生徒の食堂など生徒たちも大盛り上がりでした。また、多くの父兄・一般の方にも来ていただき、生徒と一緒に楽しんでいただきました。

◆ 同窓会報「古城の門 51 号」

8 月 1 日付けで発行され、皆様のもとへお送りしました。

柔道班 OB 会の柔和会の特別寄稿があり、5 ページ 1 面にわたる記事となりました。嘉納治五郎師範と上田中学柔道班との関わり、柔道班の 2 人の大先輩の紹介など興味の尽きない内容となっています。

当校はまだオリンピアを輩出していませんが、そこに限りなく近い存在である馬術の増田さんの記事も掲載しています。

◆ 同窓会館の耐震補強工事

同窓会館は創立 60 周年記念事業として昭和 39 年に竣工されたものですが、耐震診断により早急な耐震補強が必要と判明し、10 月より 3 か月ほどの工事を実施します。

編集後記

9月になり北海道も秋の装いになりました。上田高校北海道同窓会の会報第5号をお届けします。お盆休みは家でのんびり高校野球を観戦していました。今年の甲子園はホームランがたくさん出てスリリングな試合も多く打高投低を感じました。スタンドの応援風景をみて、ふと30年前に母校上田高校野球部の応援で夜行電車に乗り甲子園を訪ねたことを思い出しました。あの時は最終回の反撃も及ばず習志野高校に5-2で敗れてしまいました(たしかそうだったと記憶しています)。その時は30年ぶり2回目の出場と聞きましたので、また30年後くらいには出場することがあるのかなと思ったのですが、、今年がその年でした。長野県の高校野球では私立高校の牙城が高いですね(73期 北澤多喜雄)。